



発掘された
あれやこれ

印旛・柏の

珍品展



(公財)印旛都市文化財センター設立
40th 記念企画展 パート2



公益財団法人
印旛・柏文化財センター
Public interest incorporated foundation Inba-Kashiwa Cultural Property Center



開催にあたって

今回の展示は、当センター設立40周年記念企画展「印旛・柏の珍品展 パート2～発掘されたあれやこれ～」と題しまして、昨年度の展示から資料を大幅に入れ替え、印旛・柏地域の様々な「珍品」を展示いたします。今回はそれぞれの時代でテーマを設定し、その内容に沿った「珍品」を集めてきています。

また、令和 7 年度は新たに柏市が当センターに加入し、「印旛・柏文化財センター」として組織名が変更になった節目の年でもあります。それを記念し、柏市から出土した遺物の展示コーナーも設けましたので、ぜひこの機会に、各市町から出土した珍しい遺物をご覧いただき、当時の人々の生活に思いを馳せていただければと思います。より深くなった「珍品展」をぜひ、お楽しみください。

本展示が多くの方々にとって、印旛・柏地域の歴史に関心を深めていただくと同時に、文化財保護への御理解に寄与できますことを、心から願っております。また、当センターでは継続的に様々な時代の遺跡を調査し、整理、研究を行っていきます。それらの成果につきましては、ホームページ、広報誌、YouTube等で随時告知してまいりますので、ご覧いただければと思います。

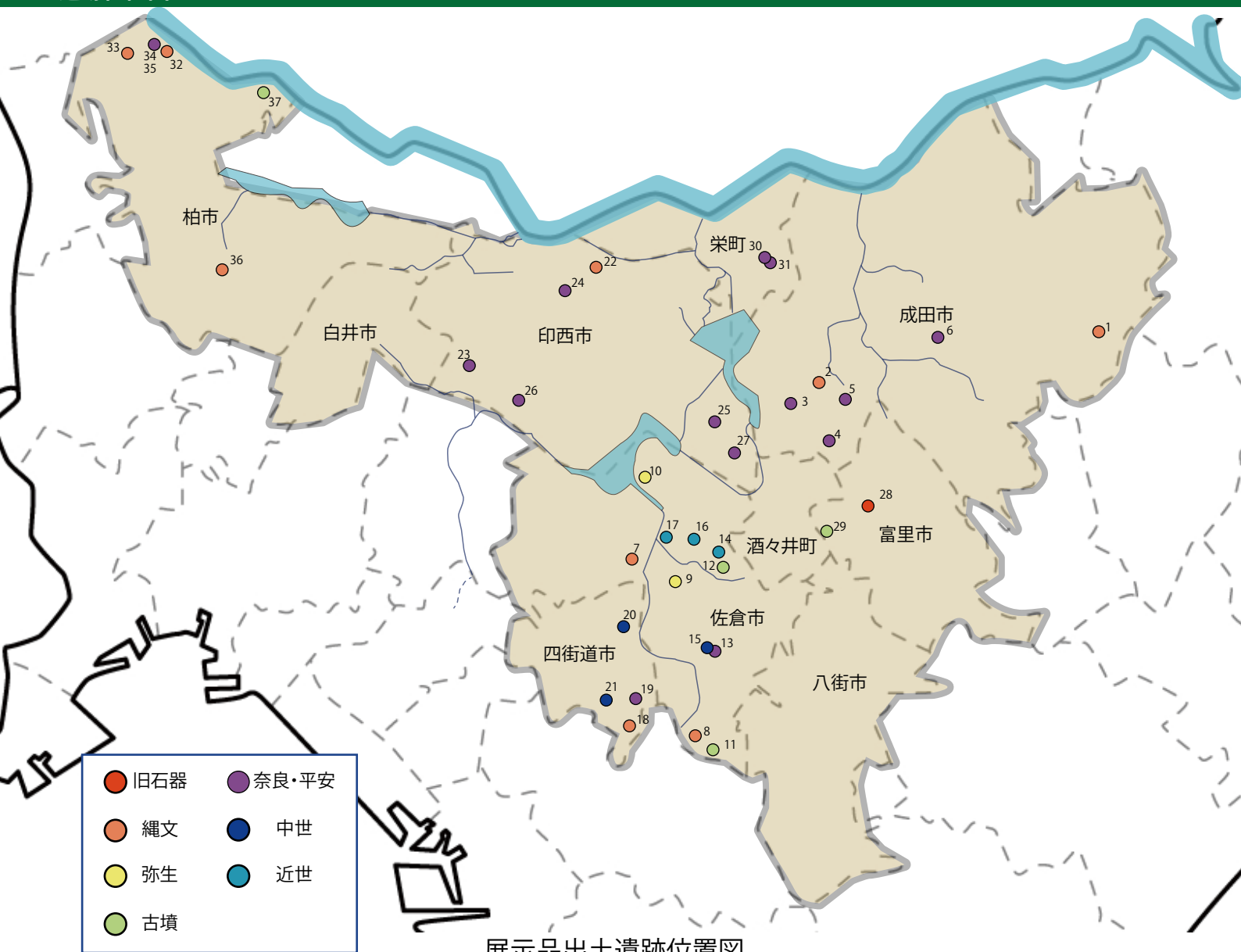
最後に、遺物・写真資料の借用に御協力賜りました各市町、御後援いただきました印旛地区文化財行政担当者連絡協議会、ならびに多くの関係諸氏・諸機関に、心より御礼申し上げます。

令和 7 年10月

もくじ

遺跡位置図	4
旧石器時代	5～8
縄文時代	9～13
弥生時代	14～16
古墳時代	17～21
奈良・平安時代	21～25
中世	26
近世	27～28
柏市	29～32
展示目録	33～35

文化財センター



展示品出土遺跡位置図

遺跡名

成 田 市 ①水神作遺跡 ②山口雷土遺跡 ③台方下平Ⅰ・Ⅱ遺跡 ④大袋腰巻遺跡
⑤南岡護台遺跡 ⑥野毛平木戸下遺跡

佐 倉 市 ⑦吉見台遺跡 ⑧宮内井戸作遺跡 ⑨大崎台遺跡 ⑩飯野町士族屋敷跡
⑪西御門新堤遺跡 ⑫高岡大福寺遺跡 ⑬六拾部遺跡 ⑭大蛇中芝遺跡
⑮神門房下遺跡 ⑯新町遺跡 ⑰佐倉城跡

四街道市 ⑱木戸先遺跡 ⑲馬込No.-1遺跡 ⑳古屋城跡 ㉑和良比堀込城跡

印 西 市 ㉒馬場遺跡 ㉓鳴神山遺跡 ㉔池ノ下遺跡 ㉕山田虎ノ作遺跡 ㉖東海道遺跡
㉗油作第2遺跡

富 里 市 ㉘東内野遺跡 ㉙駒詰遺跡

栄 町 ㉚龍角寺五斗時瓦窯跡 ㉛宮ノ後遺跡

柏 市 ㉜寺下前遺跡 ㉝出山遺跡 ㉞花前Ⅰ遺跡 ㉟花前Ⅱ-1遺跡 ㊱林台遺跡
㊲弁天古墳



ひがしうち の い せ き ○東内野遺跡とは？

東内野遺跡は千葉県富里市七栄字東内野に所在し、^{たかさきがわ}高崎川と^{ねこ}根木^{なかわ}名川の分水嶺上である標高約40mの台地上に位置します。1976～1978年にかけて東内野遺跡発掘調査団が、1988年に財団法人印旛郡市文化財センターが発掘調査を行い、後期旧石器時代後半の遺跡であることがわかりました。

この遺跡から出土した尖頭器は、当時ほかの遺跡から発見されていた石器とは異なる形をしていたため、遺跡の名を取って「^{ひがしうち}東内野^{がたせんとう き}型尖頭器」と名付けられました。そして平成19年3月23日、市指定文化財に登録されました。



図1 位置図

○東内野型尖頭器とは？

石器の側面に^{ひじょうはくり}樋状剥離^(註1)と呼ばれる特殊な加工を施した石器で、^{ひじょうはくりせんとう き}樋状剥離尖頭器(有樋尖頭器)^(註2)とも呼称される槍先形尖頭器の一種です(写真1・図2)。樋状剥離尖頭器は過去、^{おめくらぎほう}男女倉技法^(註3)と呼ばれる特殊な製作技法を用いて作られると考えられてきましたが、現在では製作工程の一環としてとらえられています。また、樋状剥離尖頭器は形態で区分することができ、左右の側縁がほぼ対象で大型のものを男女倉型、小形で樋状剥離が施された側縁が「く」の字状を呈するものを東内野型としています(図3)。分布については、関東地方周辺を中心に、^{しもうさだい ち}下総台地や^{さがみの だい ち}相模野台地、^{あかぎさんろく}赤城山麓、^{ちゅうぶこうち}中部高地の黒曜石原産地周辺で見つかっています。特に東内野型尖頭器は下総台地の印旛沼周辺に多い傾向があります。



写真1 東内野型尖頭器

※富里市教育委員会より借用

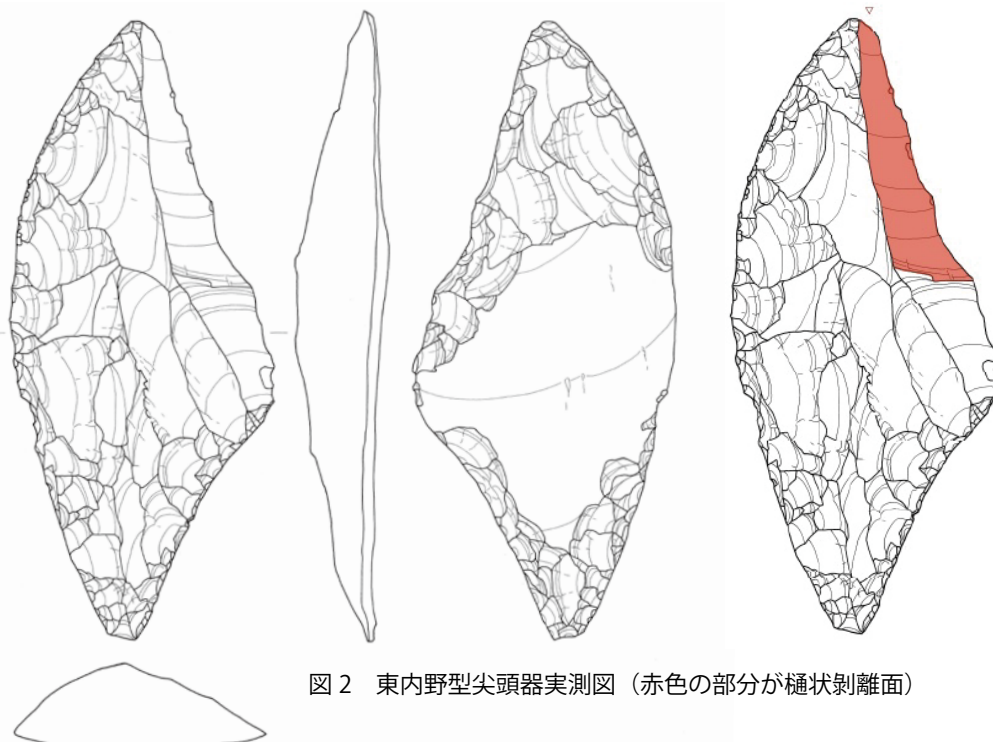


図2 東内野型尖頭器実測図 (赤色の部分が樋状剥離面)



○東内野遺跡出土の尖頭器の大きさと使用石材について

東内野遺跡からは槌状剥離を施した東内野型尖頭器のほかに、槌状剥離を施していない尖頭器、いわゆる通常の本葉形尖頭器^{（註4）}も出土しています。ここでは長さ（最大長）と幅（最大幅）の関係、外形にどのような違いが見られるのか、使用石材は何が多く使われているのかをみてみます（グラフ1・2・3）。

先ずグラフ1についてですが、東内野型尖頭器を含めた尖頭器全体での長さ（最大長）と幅（最大幅）を示しています。赤丸が尖頭器を示しています。このグラフから、出土した尖頭器の中で一番大きいものは長さ8.90cm、幅3.70cmであり、写真1・図2がこれに該当します。長さ（最大長）と幅（最大幅）については、グラフから長さ4.0～5.0cm、幅1.8～2.3cmのところに多くの赤丸が集中しています。

次に外形の違いについてグラフ2に示しました。グラフの縦軸は長さ（最大長）を示しており、横軸の「1.0」と「1.0」の間にある線は、石器の中心を表しています。またグラフ上の右図は東内野型尖頭器、左図は本葉形尖頭器を示しています。このグラフから写真1・図2で示した東内野型尖頭器を除けば、形や大きさにはほとんど違いがないことが分かります。

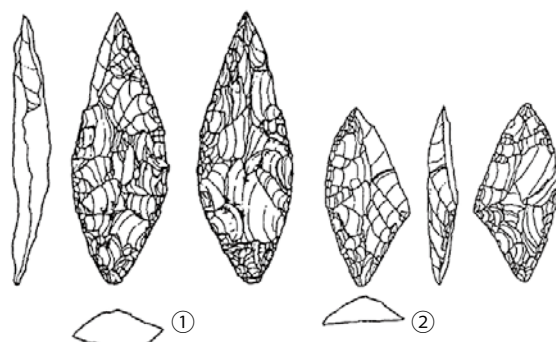
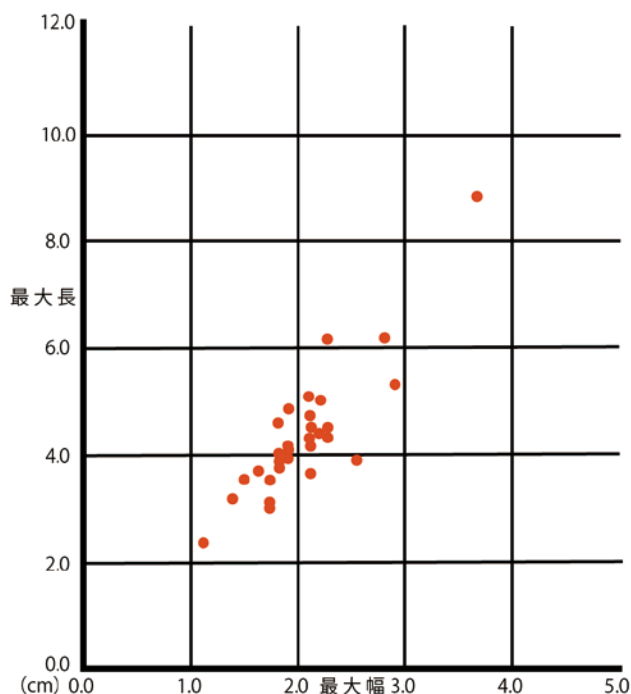


図3 槌状剥離尖頭器の種類

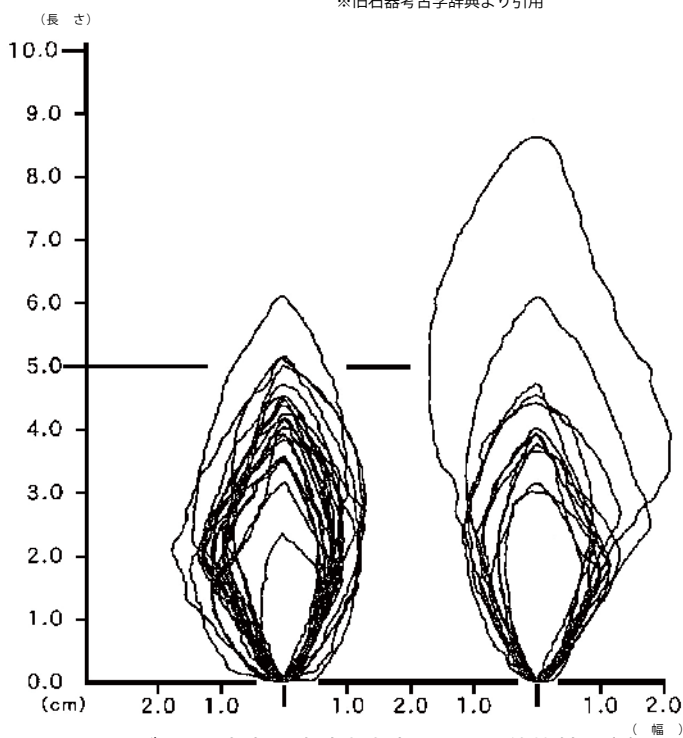
（①男女倉型 ②東内野型）

※旧石器考古学辞典より引用



グラフ1 東内野遺跡出土尖頭器の形態比較図(1)

※『千葉県文化財センター 研究紀要22』より引用・修正



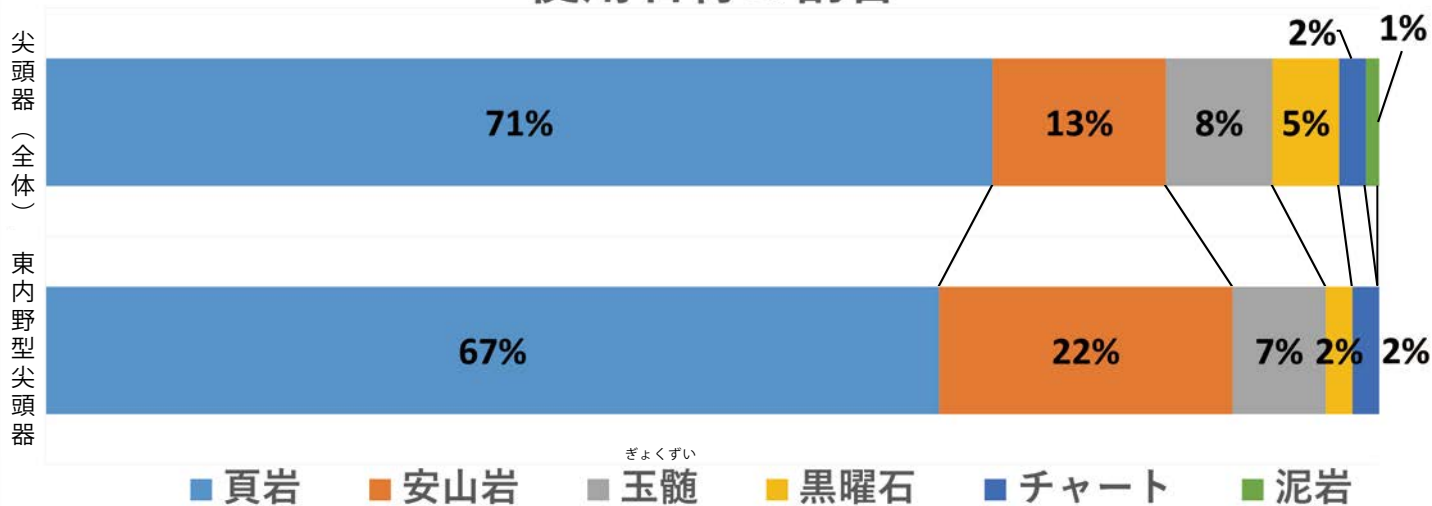
グラフ2 東内野遺跡出土尖頭器の形態比較図(2)

次に使用石材です。尖頭器全体の出土点数は182点であり、このうち東内野型尖頭器は88点（全体の33%）となっています^{（註5）}。主要な石材はグラフ3のとおり、頁岩や安山岩が全体の8割を占めています。中でも注目したい点が3つあります。1つ目は東内野型尖頭器には泥岩が使用されていない点です。泥



岩は堆積岩の一種で、非常に脆い石材です。加工はしやすいですが、壊れやすく、すぐに使えなくなってしまうことから、石器製作には不向きであったと考えられます。2つ目は安山岩の使用率が高いという点です。安山岩は火成岩(火山岩)の一種であり、石の割れ口が比較的鋭利になりやすく、硬さもあることから尖頭器に適した石材です。

使用石材の割合



グラフ 3 使用石材の割合

また科学分析による石材の産地同定の結果、図4のように茨城県や群馬県、伊豆周辺などの遠隔地から千葉県へ運ばれてきた、あるいは採りに行ったと考えられています。この点を踏まえると、交易品として、または採取・採掘した結果だと考えられます。

3つ目は頁岩が千葉県産のものか、搬入品なのかという点です。『千葉県史編さん資料富里市東内野遺跡旧石器時代石器資料調査報告書』(岡本・田村・加納・国武 2003)によると、遺跡から出土した頁岩製の石器の多くは南房総の嶺岡・保田構造帯産^(註6)の珪質頁岩を用いて作られたものであり、その他には一部栃木県高原山北麓に分布する火砕泥岩^(註7)やチョコレート頁岩、中生代の珪質頁岩が少数含まれるとしています。

このことから、嶺岡・保田構造帯で頁岩を一定数入手できる環境であった為、遺跡から出土した多くの石器に用いられたのではないかと考えられます。

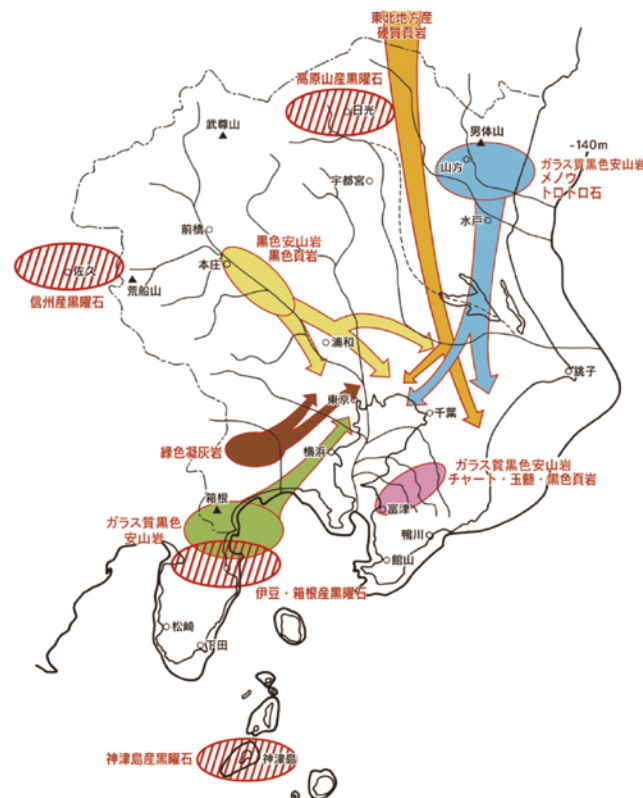


図4 関東地方における石材原産地と移動ルート



○なぜ、東内野型尖頭器は槌状剥離を施したのか？

東内野型尖頭器は、なぜ槌状剥離を施したのか？この疑問を探るうえで欠かせない資料が図5になります。図5は東内野型尖頭器の槌状剥離部分に削片（石器製作の過程で打ち欠かれた、比較的小さな破片）が接合した図です。

学史を紐解いていくと、東内野型尖頭器は槍先として捉えられ、長年にわたり研究をされてきました。槌状剥離を施したところについては、槍先を使用するたびに切れ味が落ちていくので、槍先の一部を再生する（切れ味を元に戻す）ために施されたものと考えられています。

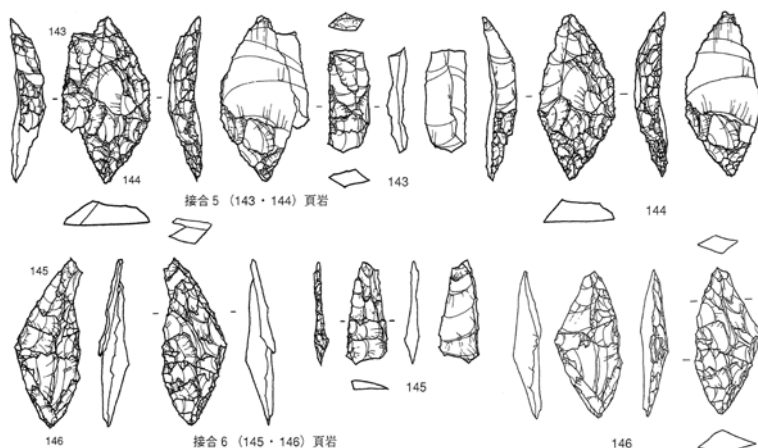


図5 東内野型尖頭器と削片の接合資料

※『千葉県史編纂資料 富里市東内野遺跡旧石器時代石器資料調査報告書』より引用

また接合する削片に注目した別の考え方もあります。ある一時期までは槍先として使用し、その目的を終えた後は、^{せっかく}石核^(註8)として使用されたという説です。なぜこのように考えられたのでしょうか？それは遺跡から出土した東内野型尖頭器に接合する削片が極端に少ないことが挙げられます。先に触れたように、槍先の先端部を再生させるだけであれば、尖頭器から剥ぎ取った部分は切れ味の無いゴミになるので、その場で破棄されると思われますが、「接合する削片が少ないこと」を考えれば、その削片を別の道具として使用したり、東内野遺跡より遠くへ運ばれていったのではないかと推測されます。

今回紹介した東内野型尖頭器は、実際に尖頭器として使用されたものなのか、または石核として使用されたのか、今後の資料の増加や研究が進めば明確になっていくでしょう。

(註1) 彫器の刃部(彫刀面)作出や石器の整形などの目的で器体の一部に施される幅の狭い縦長の剥離。

(註2) 槍先の先端部から1側縁に槌状剥離を施した槍先形尖頭器。編年の位置は、相模野台地での出土例は後期旧石器時代の槍先形尖頭器の時期とほぼ一致し、男女倉型が尖頭器文化期の比較的古い段階、東内野型はその終末期にそれぞれ位置付けられる。

(註3) 槌状剥離尖頭器の製作技法。尖頭器状の素材器体を製作し、先端部から斜めに槌状剥離を施して彫器を製作する場合と、全体を整形して槌状剥離尖頭器を製作する場合がある。森嶋稔氏が1975年に提唱し、現在では槌状剥離尖頭器の製作工程としてとらえられている。

(註4) 左右対称で先端部が尖っており、木の葉に似た形をしている槍先。

(註5) 東内野型尖頭器88点は、未製品も含まれた数値である。

(註6) 房総半島南部に位置する地質構造帯。嶺岡層群と保田層群の2つの地層が褶曲や断層によって複雑な構造を形成している。

(註7) 火山灰や火山礫などの火山碎屑物が水によって運ばれ、長い時間をかけて固結したもの。火山噴出物が堆積した泥岩。

(註8) 石器の素材をはがし取った際に残った原石のこと。



○動物とのかかわり

約1万年の長きにわたって続いた縄文時代において、その生活の中で人と動物とのかかわりはどのようなものだったのでしょうか。食料確保のために狩猟対象となるイノシシやシカにはじまり、その狩りをサポートし、人とともに生きたイヌが、どのように縄文社会で表現されてきたのでしょうか。

本章では、縄文人が生活の中でどのように動物を表現し、かかわってきたのかを取り上げていきます。それらは様々な文様として土器に装飾されたり、形作られたりしています。このように動物をモチーフとして表現しているものを「動物意匠^{どうぶつ いしょう}」と呼びます。

○土器に見られる動物意匠

草創期～早期

前期よりも前は明確に動物意匠と捉えられる表現を持つ遺物が見つかっていません。出土するのはその後、縄文時代前期からになります。

前期(3,500～5,300年前)

古いものでは縄文時代前期の諸磯式^{もろいそ}期で、イノシシの顔面の特徴をとらえた把手を持つ浅鉢があります。

四街道市に所在する木戸先遺跡からは、イノシシの顔を表現した浅鉢^{とって}の把手が複数個出土しています。このような浅鉢は群馬県西部地域周辺から多く出土しており、この意匠のルーツと考えられています。周辺の関東北西部や東信地域で比較的多く出土し、東京湾を挟んだ千葉県、印旛沼周辺で出土するのは珍しく、まさに珍品といえます。



四街道市木戸先遺跡のイノシシ獣面把手

中期(2,500～3,500年前)

中期になると、長野県と山梨県で多く確認されるヘビやイノシシ、ミミズク、カエルをモチーフにしたと考えられる意匠が付いた土器が出現します。特にヘビをモチーフにした「蛇体装飾^{じゃたいそうしよく}」と称される把手が多く、柏市の出山遺跡で確認されています。この蛇体装飾は表現が様々で、単に蛇の頭部を表現しただけのものや、とぐろを巻いたような表現までされているものがあります。



柏市出山遺跡の蛇体把手





他には、動物的特徴と人体的特徴を併せ持つ表現もあり、^{そうかんじょう}双環状の把手を頭部、その下に連なる隆起線を胴や手・足として生き物の全身を想像させます。^{すいじんさく}成田市水神作遺跡出土の深鉢は双環状の把手が口縁部直下に付き、把手を頭として2本の隆起線が胴部中心付近まで垂下し、そこからそれぞれ横方向に伸び、先端は細く分岐して指の表現がされています。同じような土器は千葉県内で確認できる資料が数点しかなく、近隣では船橋市のユルギ松遺跡から類似した土器が出土しています。



成田市水神作遺跡 抽象文土器 展開写真

後期(1,200～2,500年前)

後期の動物意匠文には中期までとは違った動物が見られるようになります。後期初頭の^{しょうみょう じ しき}称名寺式において、深鉢に付く把手部分が鳥の頭を模した表現を見ることができます。小さな環状のくぼみが目を表し、先端から伸びる表現は^{くちばし}嘴を彷彿とさせます。佐倉市宮内井戸作遺跡の鳥形把手は頭頂部と腹部にS字の表現をし、先端は内側に巻き込むような表現で、^{もうきんるい}猛禽類の嘴に似ているような^{りり}凛々しさを感じます。把手の基部外面には翼のような表現をしており、細かい刺突列が一枚一枚の羽を表現しているように見えます。背中に見える翼と同じような表現は鳥の尾なのかもしれません。



佐倉市宮内井戸作の鳥形把手





○動物形土製品

また、中・後・晩期においては、土器に動物意匠を施すだけではなく、動物そのものを模った土製品が作られるようになります。中でも多く見られるのがイノシシで、細長い胴体の先端に刻みや刺突で顔を表現し、4本の突起をつけることで足を表現しています。佐倉市吉見台遺跡からは犬を模ったと思われる土製品が出土しており、頭部の横に大きく張り出した突起で耳を、くぼみによって目や口を表現しています。



佐倉市吉見台遺跡 イノシシ形土製品



佐倉市吉見台遺跡 犬形土製品

同じく吉見台遺跡で、「海獣形土製品」と呼ばれる、特に珍しい土製品が見つかっており、水棲生物を模したものと考えられています。前述したイノシシやイヌとは様相が異なった珍品ではありますが、具体的に何の動物を模倣しているのか、まだはっきりと結論が出ているわけではありません。ヒレや嘴の表現から亀や水鳥、あるいはオットセイなどの哺乳類のような類なのではないかと推測されています。特徴は、中身が空洞となるように作り上げている点と、表面の文様を、沈線で表現している点です。交差する渦巻の両脇に三つ又に分かれた沈線が表現されています。これは玉抱き三叉文^{さんさもん}といって、縄文時代晩期に特徴的に見られる文様です。この珍品は県内の類例が非常に少なく、千葉市内野第1遺跡例で出土しています。全国的に見ると北海道の千歳美々4遺跡^{ちとせびび}から出土している、通称ビビちゃんがとても良く似ています。



佐倉市吉見台遺跡 海獣形土製品



千歳美々4遺跡 動物形土製品

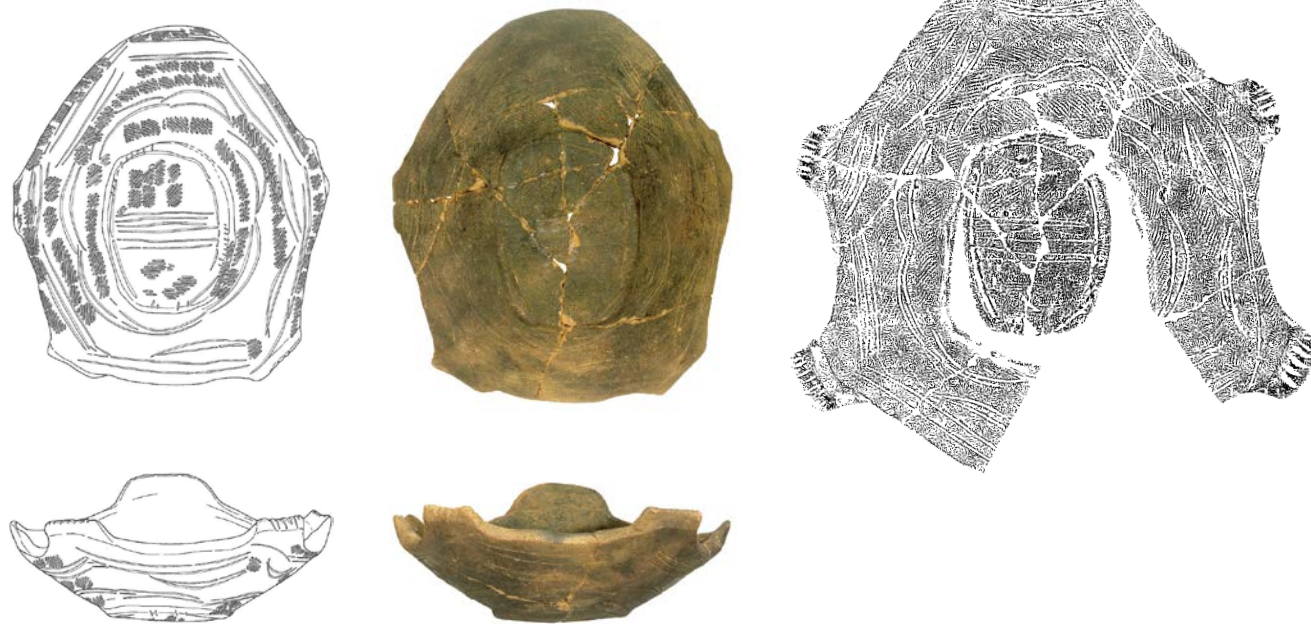
千歳市教育委員会 提供





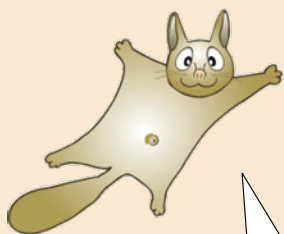
コラム①：宮内井戸作の珍品 浅鉢？！亀？！

皆さんはこの浅鉢は何に見えますか。口縁部の5単位の波状部分の内、4つの先端部分に刻みが表現されています。刻みの無い口縁部分を頭、他の刻みがある口縁部分を指や足の表現として捉え、亀のように見ることもできるのではないのでしょうか。

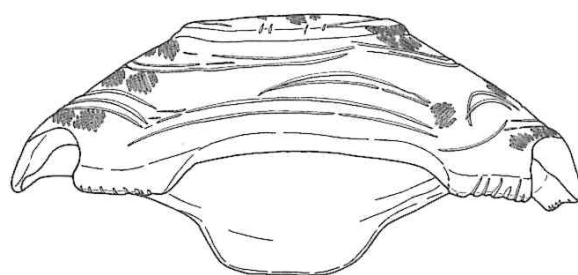


宮内井戸作遺跡 動物模倣浅鉢

ひっくり返すと…



亀みたいだね！
他にも似たようなのあるかなあ？





コラム②：印西市馬場遺跡第5地点の中の動物

縄文人たちが狩猟対象としたイノシシやシカは食料として確保され、食した後に、角や骨は道具として使われることがあります。それらは^{こっかく し が せいひん}骨角歯牙製品や骨角器と呼ばれ、^{ぎょうろう ぐ}漁撈具として釣針やヤスなどに加工されます。本来、骨は日本の土壌では溶けてしまうことが多いのですが、貝と一緒に埋まることで、貝から出る炭酸カルシウムの成分によって、残りやすくなります。そのため、出土する骨はとても貴重なものになります。



241号土坑 断面図



動物骨出土状況

馬場遺跡第5地点の241号土坑からはヤマトシジミを主体とした大量の貝に交じって様々な遺物が出土しています。深さが5mを超える大型土坑で、確認面から底部まで貝が沢山混ざっており、出土する土器は縄文時代中期の加曽利EIV式から晩期の安行3b式まで確認されています。遺物は注口土器やミニチュア土器、土製円盤、耳飾、土偶などが確認されています。注目するポイントの一つとして、大型の獣であるシカやイノシシの骨が多く確認されると同時に、ヤスや針類、装飾品類などの骨角器も出土しています。



ハマグリ 貝刃



鹿角製 骨角器

(右上2点：骨鏃、左端1点：骨針)
(右下4点：ヤス)

左上：イノシシ 中央：カモ
左下：マダイ 右：シカ





テーマ：弥生時代の食

皆さんは「弥生時代の食(事・物)」と聞いてどんなものを思い浮かべるでしょうか？

弥生時代は一般的に「稲作(水稻耕作)が始まった時代」と言われ、お米のイメージが強いのではないのでしょうか。果たして本当にそうなのか？今回はいくつかのテーマに分けて弥生時代の食を見てみましょう。

○縄文時代との違い

歴史の教科書などでは、縄文時代は狩猟・^{ぎょうろ}漁撈・採集、弥生時代は農業の時代と言われます。

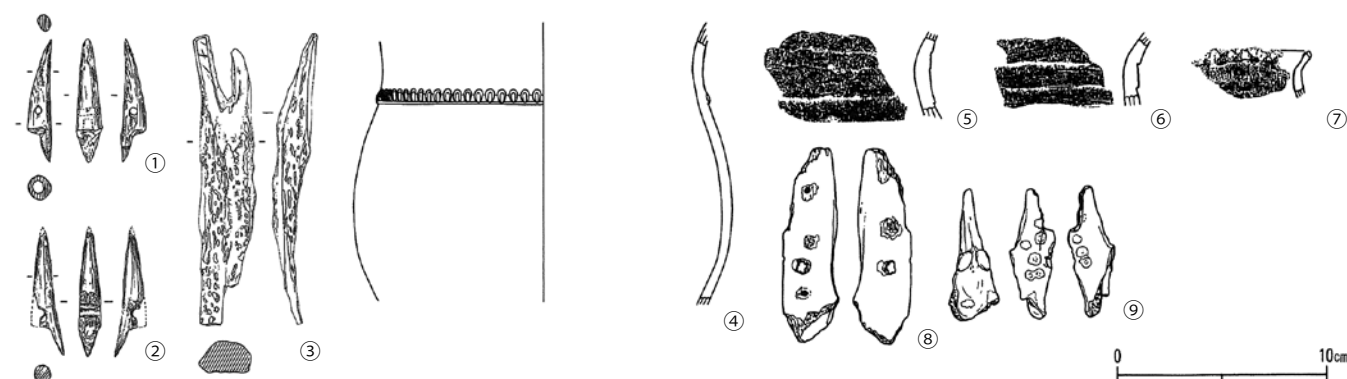
縄文時代の有名な遺跡には千葉市加曽利貝塚などの貝塚があり、たくさんの貝殻が見つかることから当時の食事の様子が伺えます。

弥生時代の食が分かる遺跡には静岡県の登呂遺跡があり、水田の跡が見つっています。また九州の縄文時代晩期末葉(縄文時代の一番最後の時期)には、土器にイネ・アワ・キビなどの圧痕が確認されています。

一見すると縄文時代と弥生時代では全く違う生活をしているように見えますが、果たして縄文人はまったく農業をしていないのでしょうか？そして、弥生人はイノシシやシカを捕まえたり、海や川で釣りをしたりしなかったのでしょうか？

弥生時代の漁撈具として、^{りとうもり}離頭鉞やアワビオコシが見つっています。これらはシカの角を原材料に作られています。全国的に見ても遺物は多くはありませんが、関東地方では神奈川県三浦半島や千葉県南部の海岸沿いに点在する^{かいしよくどうけつ}海蝕洞穴(海岸沿いの崖が波や風によって削られてできた洞穴)内の遺跡で見つっています。千葉県の海蝕洞穴では土器以外にも占いなどに使われたと考えられる^{ぼっこつ}卜骨が確認されています。これは三浦半島の洞穴でも見られる特徴であり、千葉県南部と三浦半島での海を通じた交流も伺い知ることが出来ます。

こういったことから弥生人もシカを捕まえていたこと、またシカの骨や角を材料とした道具を使って、魚や貝などの海産物も確保していたことがわかります。



海蝕洞穴出土遺物
 神奈川県三浦市大浦山洞穴出土 ①・②：離頭鉞 ③：アワビオコシ
 千葉県勝浦市本寿寺洞穴出土 ④～⑦：弥生土器 ⑧・⑨：卜骨



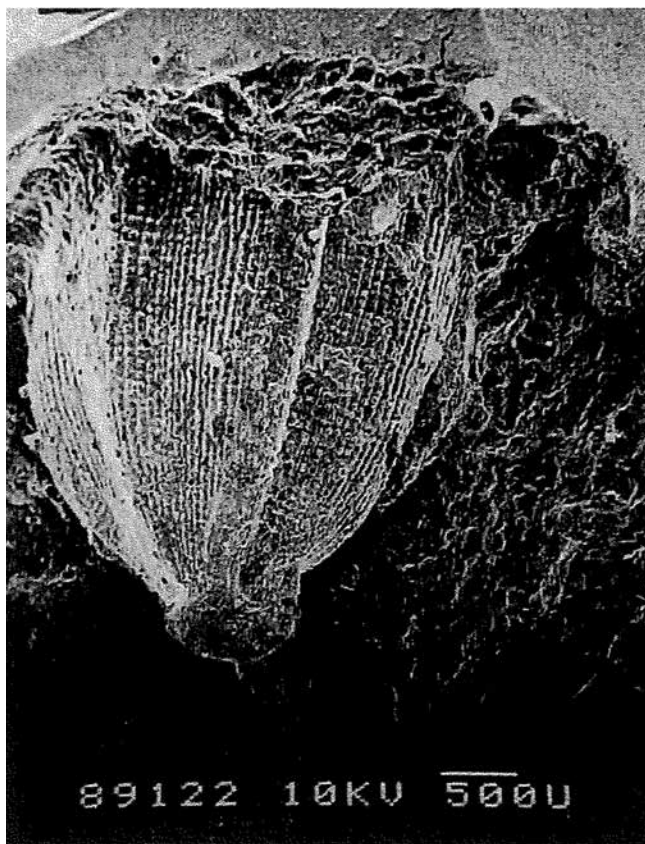
○圧痕の分析—どのように種類を区別するのか—

土器は粘土を捏ねて作るため、さまざまな痕跡が残ります。時には製作者の指の痕や爪の痕が残ることもあります。土器を作る時に周りにあったものを混ぜ込んでしまう場合もあります。この土器に混ぜ込まれたものの痕跡を考古学では「^{あっこん}圧痕」と呼びます。

圧痕は土器の胎土内に混ぜ込んだものの形を細かな部分まで残していることが多く、詳細に観察すれば、一体何が混ぜ込まれてしまったのかがわかります。この情報は土器が作られた当時、生活していた周辺にどんなものが存在していたのかを教えてくれるものであり、食べ物であれば食生活や食品の生産環境があったことを、昆虫であればその昆虫に適した環境があったことを教えてくれます。

圧痕の分析方法の代表的なものが、レプリカ法といわれる分析方法です。レプリカ法では土器に残された圧痕に、シリコンなどの樹脂を流し込み作ったレプリカ(土器に巻き込まれたもののレプリカ)を詳細に分析します。

こうして確認される代表的なものはイネ・アワ・キビ、マメ科植物・シソ科植物などの他に、コクゾウムシなどの昆虫の痕跡が確認されることもあります。



埼玉県 用土・平遺跡出土土器にみられた粳



東京都 田園調布南遺跡出土土器にみられた玄米

丑野毅・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』第24号より引用



○貝塚について

弥生時代にも貝塚は存在しており、弥生土器第一号が見つかった現在の東京大学周辺の文京区本郷の弥生町の遺跡も貝塚でした。また、神奈川県川崎市にある南加瀬貝塚も弥生時代の貝塚であることがわかっています。千葉県内では市原市郡本遺跡群^{こおりもと}などでも弥生時代中期の住居跡のなかに小さな貝塚が作られているのが見つかっています。



市原市東千草山遺跡 6号住 貝出土の様子

弥生時代の貝塚は縄文時代に比べて規模は小さくなり、数も少なくなります。この時代にも残ります。

貝塚は簡単に言ってしまうと、ゴミ捨て場です。捨てられたゴミからは当時の生活、特に食生活がよくわかります。市原市郡本遺跡群の例では、縄文時代よりも大きなハマグリが見られるほか、少量ではありますが、クロダイ・スズキ・ウナギの魚骨^{ぎょこつ}、ニホンジカの獣骨^{じゅうこつ}などがみつかっています。



市原市東千草山遺跡 6号住 貝層断面

このことから、現在の生活と同じように主食にあたるお米などの穀類とおかずにあたる様々な食材を食べていたことがわかります。

○家畜について

弥生時代にはブタの痕跡が確認できるといわれています。そもそもブタ(学名: *Sus scrofa domesticus*)は哺乳綱鯨偶蹄目イノシシ科の動物です。

イノシシ(学名: *Sus scrofa*)を家畜化した生き物であり、ブタとイノシシは交配して数を増やすことも可能です。骨格にはやや違いがあり、首の骨の発達が野生のイノシシに比べて少ないことや歯が小さいこと、頭蓋骨の後頭部側が丸みを帯び、頭頂部方向に長くなる(高くなる)ことが指摘されています。

弥生時代の遺跡からは、イノシシの骨や牙が出土することがありますが、その中には詳細に分析を行うとブタのものと判断できるものも紛れており、一部では家畜化が始まっていたと考えられます。



今回の展示は、日常生活を送る集落で行われた非日常的な珍しい行為＝「^{さいし}祭祀」に関する遺跡を中心に紹介していきます。

○集落の中の祭祀遺構

^{にし み かどしんづみ}
佐倉市西御門新堤遺跡

～小さい土器の集まり～

佐倉市西御門字新堤に所在し、鹿島川と弥富川に挟まれた標高40m前後の



写真1 佐倉市西御門新堤遺跡出土ミニチュア土器

台地上に位置しています。旧石器時代から近世までの遺構・遺物が確認されており、古墳時代前期^(註1)の遺構がもっとも多く見受けられます。ここで検出した「土器集積遺構」も古墳時代前期のものになります。

土器集積遺構は、同じ場所から土器が集中して出土する遺構のことを指し、この遺跡では2カ所確認されています。この遺構から出土する土器は、実用的ではない小形の土器(ミニチュア土器)のみであることや、胴部を意図的に打ち欠いたと考えられる個体もあることから、何らかの祭祀が行われたことが示唆されます。また、33号住居跡では、土器集積遺構と同じく、ミニチュア土器が多量に出土しているほか、他の住居跡でも土器を廃棄、配置した形跡が見られることから、集落内において数種類の祭祀が行われていたことが考えられます。

^{こまつめ}
富里市駒詰遺跡 ～最新文物の出土～

富里市新橋字駒詰に所在し、高崎川中流北岸標高約35mの台地上に位置しています。また、同じ台地上に印旛郡酒々井町尾上木見津遺跡^{おがみき みつ}という名称の異なる遺跡が隣接していますが、これは江戸時代に放牧していた馬を囲うために築かれた野馬土手が台地上を南北に縦断しており、それがそのまま富里市と酒々井町の行政境となったためです。これらの遺跡を総合的に見てみると、旧石器時代から近世までの遺構・遺物に加え、古墳や野馬土手といった地上遺構も確認されています。

駒詰遺跡で検出された祭祀遺構は、集落のもっとも北側の斜面地に立地しており、滑石製の剣形模造品、鏡を模した有孔円板、勾玉、赤彩土師器高坏・坏・壺などがまとまって出土しているほか、出土例が稀な初期須恵器^(註2)も確認されていることからその特異性が伺えます。

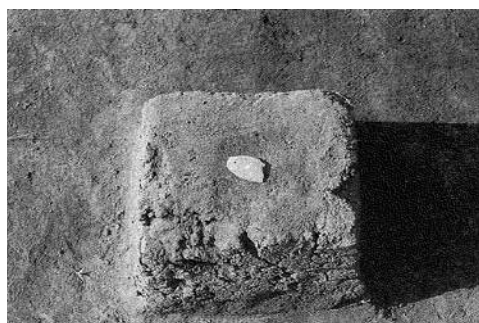


写真2 剣形石製模造品出土状況



写真3 有孔円板出土状況



写真4 祭祀遺構出土
初期須恵器



また、住居跡からも初期須恵器が出土していることから、朝鮮半島より新しい技術がいち早く導入された先進的な遺跡であったと考えられます。加えて、古墳時代中期における祭祀エリア、生活エリア、お墓エリアが同じ台地上から一体で検出された数少ない遺跡となっています。



写真5 駒詰遺跡第3地点2号住居出土初期須恵器



写真6 駒詰遺跡第1地点1号住居出土初期須恵器(坏蓋)

佐倉市高岡大福寺遺跡 たかおかだいふくじ ～赤く塗られた多量の土器～

佐倉市高岡字大福寺に所在し、高崎川沿いにある標高約33mの台地上に位置しています。この遺跡では旧石器時代から近世までの遺構や遺物が確認されていますが、旧石器時代から縄文時代の遺構は少なく、この台地が本格的に利用され始めるのは弥生時代以降となります。特に古墳時代後期の遺構が多く、竪穴住居跡や土坑、周溝墓が検出されました。ここで紹介する祭祀遺構もこの時期のものになります。

祭祀遺構とされる90号土坑からは、多量の土器が出土しており、ほとんどの土器が赤く塗られています^(註3)。赤く塗られた土器は古墳時代以前から確認されており、その多くは祭祀に関わるものになります。この遺構でも赤く塗られた土器がまとまって出土していることに加え、多くの土器が完全な形で残っています。また、土坑の隅にまとまっていることから、意図的に埋納されたと考えられます。



写真7 90号土坑遺物出土状況

成田市南羽鳥中岫第1遺跡F地点 みなみ は どりなかのごき ～祭祀用の赤い須恵器～

南羽鳥遺跡群を構成する遺跡の一つである成田市南羽鳥中岫第1遺跡F地点は、成田市南羽鳥字中岫に所在し、利根川から3kmほど離れた、成田市を南北に流れる根木名川西岸の標高約25～35mの台地上に位置しています。

この遺跡の祭祀遺構は、土器を地面に直接配列したものになります。出土した遺物は土師器の坏が主体であり、1,000点を越えていたと推測されます。他にも、須恵器、鉄器、玉類が出土しています。また、出土遺物から、この祭祀遺構は古墳時代後期に属するものとされています。



この遺構の祭祀は数回にわたって行われており、6つのかたまり(ユニット)に分割することができます。

注目すべきはユニット1から出土した須恵器の広口壺です。これはいわゆる「赤焼き須恵器」と呼ばれるものになります。一般的な須恵器は窯を使用し、高温で焼かれるため灰色になりますが、赤焼き須恵器は赤く発色するよう、通常より低い温度で焼かれています。この赤い須恵器の使い道ですが、他地域の例を見ると、この遺跡同様、祭祀遺構から出土することが多く、祭祀のために作られたものと考えられます。また、同ユニットから勾玉や管玉などの玉類が出土しています。これらは通常、古墳の副葬品として多く見られますが、ここでは土器の中から出土しており、祭祀のため意図的に埋納されたと考えられます。

ユニット2～ユニット4からは鎌や鋤先といった鉄製品が出土していることや、馬具が出土しているユニット6では、馬を供えた可能性が高いことから^(註4)も、当遺跡では水や農耕に係る祭祀が行われたものと考えられます。



写真8 祭祀遺構土器集積状況

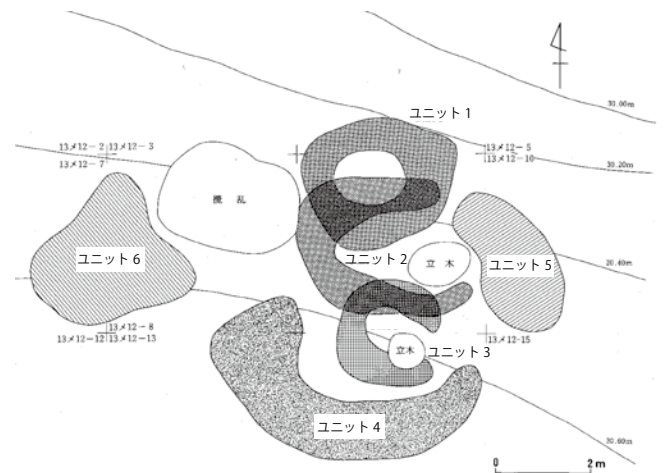


図1 祭祀遺構ユニット概略図



写真9 赤焼き須恵器広口壺



写真10 祭祀遺構管玉出土状況

○まとめ

以上、4つの遺跡で確認された祭祀遺構を見てきました。祭祀に係るものは、今回取り上げた単独のものほかに、佐倉市西御門新堤遺跡33号住居跡や約200点の土器が出土した印西市光明寺遺跡3号住居跡のように住居跡を利用したものなどが挙げられます。



また、祭祀遺構ではありませんが、祭祀に関係する石製品、石製模造品を製作している集落は印旛郡域をはじめ北総地域で多く確認されており、この地域を特徴づけるものとなっています。

今回は集落における祭祀遺構を中心に見てきましたが、古墳においてももちろん祭祀は行われており、印旛郡域における古墳に関係する祭祀は、ムササビ形埴輪や下総型円筒埴輪などをはじめとした埴輪祭祀や、死者のために作られた石枕(成田市台方宮代遺跡、成田市船形手黒1号墳など)、佐倉市大作1号墳で見られる馬の殉葬など枚挙にいとまがありません。

今回紹介した祭祀遺構は、印旛地域の中でも一部のものにすぎません。今後、調査例の増加に伴い、当時の人々が何を考え、何を祈っていたかが少しでも解明されることを期待したいと思います。

コラム：^{もが}殯施設？^{りゅうかくじ}埋葬施設？ 栄町^{おがみ}龍角寺尾上遺跡

当遺跡は、古代の初期寺院である龍角寺の東400mに位置し、土塁を伴う大規模な長方形周溝、特殊竪穴状遺構、竪穴住居跡が検出しています。

特殊竪穴状遺構は、底面に掘り込みがあり、井桁を組んだ形跡があります。平面的に見ると、井桁の内部に多量の炭化材が残っ

ており、井桁の外側には裏込めの粘土が確認されたことから、大規模な地下式木室を組んでいたことが考えられます。また、木室内部から20～30cmほどの巨大な釘が出土しており、そのサイズから寺院などの大型構造物に使用されるものであり、木室を組む際に使用されたとは考えにくいものになります。

竪穴住居跡は、カマドがついていますが、焚口や燃焼部の掘り込みや、底面に焼けた跡がほとんどなく、床も踏み固められた様子がうかがえず、使用痕跡が貧弱であり、短期間の使用が考えられます。

これらの遺構群について、竪穴住居跡は^{もや}喪屋としての機能が想定されていますが、特殊竪穴状遺構については、人が亡くなってから墓に埋葬されるまでの間の儀式(殯)が行われた場と捉える説と、鉄釘を副葬品とする、大型構造物の建設に関わった人物のお墓(木室墓)とする説があります。

当遺跡は、上記のように殯施設あるいは埋葬施設であるため、集落遺跡を扱った今回の趣旨とは少し異なりますが、集落(生)から墓域(死)へ移される過程に関わる珍しい遺跡であるため紹介させていただきました。



龍角寺尾上遺跡航空写真

(註1) 古墳時代は、前期(3世紀中頃～4世紀後半)、中期(4世紀後半～5世紀後半)、後期(6世紀～7世紀)の3時期に区分されています。また、後期のうち、前方後円墳の造営が停止し、畿内を中心に八角墳が造営される7世紀中頃以降を終末期と呼ぶこともあります。

(註2) 古墳時代中期になると朝鮮半島から馬やカマド、横穴式石室などの新しい文化が導入されます。須恵器もその一つであり、導入されて間もなくのものを初期須恵器と言います。

(註3) 土器を赤く塗る行為のほかに、古墳の石室を赤く塗る例もあることから、赤には特殊な意味合いがあったと考えられています。

(註4) 古墳時代、大阪府中野遺跡では、井戸の中から馬の頭骨が見つかったほか、『日本書紀』には雨乞いのために牛馬を供える祭祀を行ったという記事があります。また、平城京では、道路の脇を流れる水や運河から土馬が出土しており、古代より、水と馬は大きく関わっていたものとされています。



コラム①：古代の仏教寺院～古墳時代から歴史時代へ～

日本に仏教が伝来したのは、6世紀頃のことであるとされています。当時、国の中心は奈良県であり、仏教を受け入れるか受け入れないかの2択を迫られていました。受け入れ賛成派代表であったのが蘇我^{そが}氏で、反対派の代表であったのが物部^{もののべ}氏です。

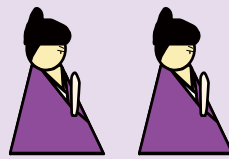
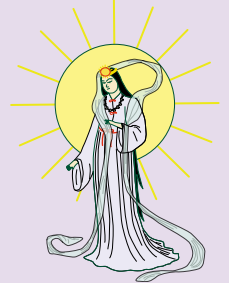
蘇我^{そが}氏の一族に蘇我^{そが}倉山田石川麻呂^{くらやまだのいしかわ まる}という人物がいます。この人物は、奈良県にかつてあった山田寺^{やまだでら}創建の発起人です。この山田寺は、印旛^{いんぱん}郡^{ぐん}栄^{さかえ}町^{まち}にある龍角寺^{りゅうかくじ}と深いつながりがある寺で、龍角寺の創建時の瓦は、山田寺^{かわらもん}の瓦の文様^{よう}を基に造られました。

この瓦に関しては、房総各地の寺院でも同様に出土していますが、その文様形態から龍角寺は房総でも最も古い寺院に位置付けられています。

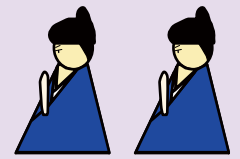
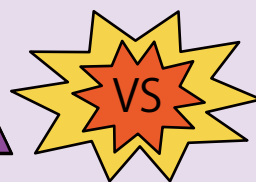
仏教



日本古来の信仰



崇仏派^{すうぶつ}
蘇我氏



廃仏派^{はいぶつ}
物部氏



印旛郡栄町龍角寺



奈良県桜井市 山田寺跡

す。そのような瓦や、出土遺物から時代は7世紀後半ごろに創建されたと考えられ、山田寺とほぼ同時期であると考えられます。

また、龍角寺の本尊^{ほんぞん}で国の重要文化財に指定されている薬師如来坐像^{やくしにょらいざざう}は、細部は異なりますが、かつて山田寺にあった仏像と同様の作風を持っています。このようなことから、龍角寺を創建した豪族^{こうぞく}は中央との強い結びつきがあったものと考えられます。



龍角寺本尊 薬師如来坐像(複製)



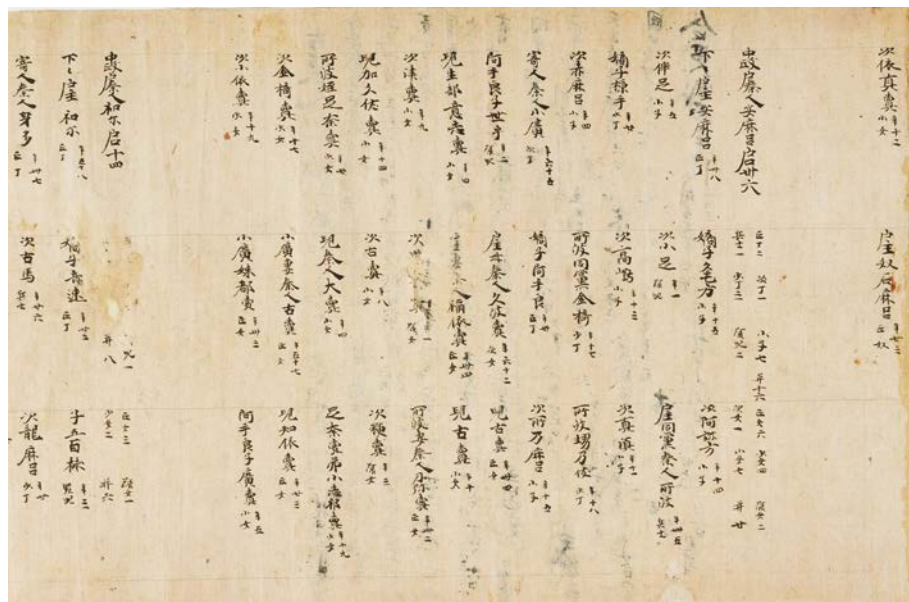
山田寺仏頭(複製)



○古代の人々の暮らしのてがかり

奈良・平安時代の資料として、それまでの時代にはない特徴的なものが文字資料です。7世紀以降、地方の统治者や政治に関する役人にまで筆や墨・硯が広まり、古代国家における文書行政の体制が整えられていったものと考えられます。文書の媒体は木簡や紙など様々であり、「正倉院文書」の中にある大宝二(702)年の御野国(現岐阜県南部)の戸籍が最古の紙媒体の資料として知られています。土器に墨で文字を書くという行為も、この頃に本格的に始まったものと考えられます。このような文字で書かれた資料は、当時の生活や信仰を考えるうえでとても重要な資料となります。

本章では、中央から遠い下総国で書かれた文字を頼りに、当時の人々がどのような信仰を持っていたのかを紹介していきたいと思います。



たいほうにねんみのこくかもぐんはんぶりこせき
大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍



埼玉県行田市稲荷山古墳出土鉄剣
(右：表 左：裏)

所有：国(文化庁保管)、
写真提供：埼玉県立さきたま史跡の博物館

○墨書土器

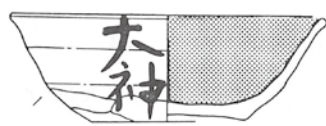
墨書土器は、その名のとおり墨で文字や記号が書かれている土器のことです。全国の遺跡から出土しており、時代を知る重要な手掛かりとなります。文字が日本にやってきた時期を正確に測ることは困難ですが、当時の中国との関係を築くために必要であったと考えられています。埼玉県行田市の稲荷山古墳出土の鉄剣は5世紀後半の年代が刻まれている非常に貴重な遺物です。土器に書かれるものは様々で、地名や人名、神仏への祈り、記号などがあります。また、それらが1文字なのか2文字なのか、文章としてあるのか、はたまた絵が描かれているのか。多くの種類があり、その意味を深く考えさせられます。



○印旛の墨書土器

かつて下総国(現千葉県北部)と常陸国(現茨城県)の間には広大な内海が広がっていました。全国的に、この内海周辺から墨書土器の出土が多いことが確認されていて、印旛沼周辺地域でも多く出土しています。

墨書土器に書かれるのは神仏への祈りと考えられるものが多く、古代の人々の死生観や信仰が垣間見える貴重な資料です。特に「神」と書かれた墨書は、印旛沼沿岸部に集中して出土しており、この地域の神を祀る信仰が伝わります。中には、より直接的に祈りの文言を書いた墨書土器もあり、印西市の鳴神山遺跡からは「國玉神 上奉 丈部鳥 万呂」と書かれた土器が出土しています。これは、丈部鳥万呂という人物が、國玉神に対して何か捧げものをし、祈りをささげているものと解釈できます。また、このような「神」への信仰のほかに仏教に関連すると思われる墨書も出土しています。成田市の南囲護台遺跡から「寺社」と書かれた墨書が出土しており、神道と仏教が合わさった神仏習合をあらわしていると考えられます。このほかにも、柏市の花前1遺跡から「☆」「◎」と書かれた墨書が出土しています。道教にまつわる魔除けの意味を持つ、寺社とは別の信仰の形が表れている珍しい土器です。



印西市油作第2遺跡出土墨書土器
「大神」



成田市大袋腰巻遺跡出土墨書土器
「歳神」



成田市大袋腰巻遺跡出土墨書土器
「神奉」



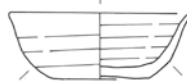
成田市南囲護台遺跡(第2地点)
出土墨書土器
「寺社」



印西市 鳴神山遺跡出土墨書土器
「國玉神 上奉 丈部鳥 万呂」



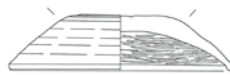
柏市花前1遺跡出土墨書土器
「☆」



柏市花前1遺跡出土墨書土器
「◎」

古代から残っている地名に、四街道市の山梨という地名があります。これは、「倭名類聚抄」という10世紀頃の書物に記載のある千葉郡の地名です。

現在の山梨の周辺にある南作遺跡と馬込No. 1遺跡からは「山梨」と書かれた墨書が出土しています。このことは、文献と考古学が一致した例であり、古代山梨郷の証明につながる貴重な事例です。



四街道市馬込
No. 1遺跡出土
墨書土器
「山梨」



山梨郷位置図



○地方統治の体制

大化の改新後(645年頃)の地方政治は、国を中心に、それぞれの郡が治める形で行われていました。

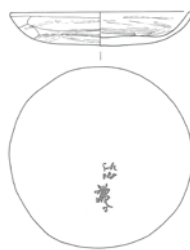
これは、現代でいう県と市町村の関係とほぼ同じです。「倭名類聚抄」には、^{しもうさこく}下総国に^{かつしか}葛飾・^{いん}千葉・^ば印^{そうさ}播・^{そうま}通瑳・^{さしま}相馬・^{ゆうき}猿島・^{とよた}結城・^{うなかつ}豊田・^{かとり}海上・^{はにゆう}香取・埴生という11の郡が記載されています。奈良時代には、これらの郡の下に郷と呼ばれる最小単位がありました。これらを現在に照らし合わせると、例として千葉県・佐倉市・春日が国・郡・郷に該当します。

発掘調査では、この「郡」が書かれた墨書土器が出土しています。成田市の大袋腰巻遺跡からは、「印波郡」と書かれた^{こしき}甑が出土しており、同じ遺跡から「印波」と書かれた^{ばん}盤も出土しています。また、墨書土器ではありませんが、栄町の龍角寺五斗^{りゅうかくじ}時瓦窯跡からは「皮^{はにふ}尔^か負^{とり}」や「加刀利」と刻まれた瓦が出土しています。このように特定の地域を指す文字の出土は稀ではありますが、当時の地名を文献資料と照らし合わせることで非常に貴重な発見となります。

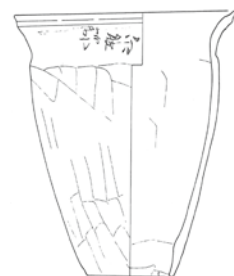


古代下総国図

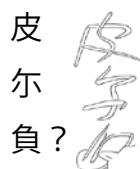
※『千葉県の歴史』通史編古代2から引用加筆



成田市大袋腰巻遺跡出土
墨書土器「印波」



成田市大袋腰巻遺跡出土
墨書土器「印波郡」



皮
尔
負?



加
刀
利



栄町龍角寺五斗時瓦窯跡出土 栄町龍角寺五斗時瓦窯跡出土
文字瓦「皮尔負」 文字瓦「加刀利」

印旛郡のトップである郡司は^{はせつかべ}丈部氏という氏族でした。

印旛郡域では、丈部と書かれた墨書土器が多数出土しており、その支配下であったことがうかがえます。また、印旛郡の隣にある埴生郡の郡司は、^{おおみづべ}大生部氏という氏族であると考えられています。この2氏については、長年その関係性や支配領域についての議論が続いており、今後の研究の課題となっています。



左兵衛下総國埴生郡大生直野上養布十段



平城京左京二条二坊五坪二条
大路濠状遺構(北)出土木簡



印西市鳴神山遺跡出土墨書土器
「丈尼 丈部山城方代奉」



コラム②：物部氏は千葉県にいた！？

仏教に反対した物部氏は、蘇我氏によって滅ぼされています。しかし、物部氏は^{や そものべ}八十物部と呼ばれるほど同族が多く、全国にいたとされています。印旛郡内である四街道市の物井はもともと物部氏が住んでいたことから物部郷と呼ばれていたとされています。

また、八千代市の^{かみ や}上谷遺跡からは「物部真依 延暦十年十一月七」と書かれた人名紀年銘土器と呼ばれるものが出土しており、物部姓の人物がいたという証拠になります。

さらに、千葉県^{そう さ}匝瑳市は、^{もののべのおごと}物部小言が匝瑳郡を造ったことに由来するという文献もあります。

物部氏は一般に軍事を司っていたとされており、東北の勢力に対しての前線となる地域にこのような氏族がいたことは偶然ではないでしょう。

印旛・手賀沼地域にある鳥見(とみ・とりみ)神社は、物部氏の祖先神であるとされるニギハヤヒを祀っています。ニギハヤヒは日本神話において大和の地に降り立ち、その地を治めた神です。印旛・手賀沼地域には鳥見神社が21社あり、その多くはニギハヤヒを祀っています。中でも、印西市小林にある鳥見神社は、周辺で最初に創建されたと伝わる神社です。

印旛・手賀沼地域では印西市と白井市、それと柏市にあるのみで、他地域では祀られない特殊な神社です。全国でも“鳥見”と名の付く神社は、この地域以外には奈良県にしかありません。奈良県宇陀市には鳥見山という山があり、山頂近くには鳥見社が建てられています。また、桜井市にも鳥見山という山があり、西麓には等彌(とみ)神社が鎮座しています。

地域が限定されすぎており、物部氏がいた証拠となるかは非常に難しいところではありますが、遙か遠くの地で同じような名が伝わることは、とてもロマンを感じます。



八千代市 上谷遺跡出土墨書土器
「物部真依 延暦十年十一月七」



印西市小林 鳥見神社



奈良県桜井市 等彌神社

印旛地域では、15世紀に防禦施設が発達した城跡が数多く造られました。なかには、四街道市和良比堀込城跡のように館に深い堀や土塁を廻らし城郭化したものもみられます。和良比堀込城跡では主郭に堀立柱建物跡が確認され、鍋、鉢、甕などの生活用具が出土しました。館や屋敷は土地を治める領主などの政治や生活の場であったため、在地の鍋やすり鉢などのほかに、瀬戸・美濃の小皿や碗、常滑の甕など、現在でも焼き物で有名な地方の製品も使われていました。また、日用品以外では、五輪塔や板碑、天目茶碗などが出土しました。五輪塔とは供養塔の一種で、それぞれの石は仏教の「宇宙は五つの要素からできている」という思想の「五大」を表し、上から空輪、風輪、火輪、水輪、地輪に分けられます(第1図)。四街道市の古屋城跡や東作遺跡など中世の城跡では、五輪塔の一部が堀の中から出土しています。城の主郭に立てられていたものが、城が放棄される際に堀などに投げ込まれたものと推測されます。

中世城郭の遺構としては、古屋城跡で発掘調査が行われています。平成27年度に行われた調査では幅最大5.3m、深さ4.1mの障子堀^{しょうじぼり}という内部を畝状に区切った堀が長さ40mにわたって検出されました。この時の調査では、3期にわたって防禦施設が築かれたことが判明しています。令和5年度の調査では障子堀に加え、さらに城の内側に幅約7m、深さ約3mの巨大な空堀^{からぼり}が検出されました(第2図)。

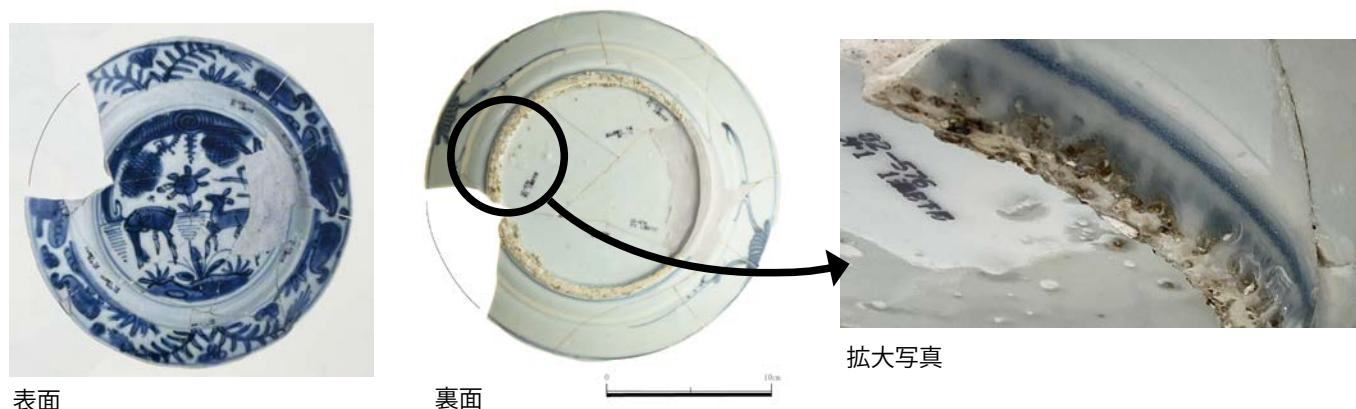


第3圖 皇宋通寶

今回の展示では、中世の遺跡から出土した銭貨(宋銭・明銭)を揃えました。これらの銭貨からは、当時の日本では中国で鑄造された銭貨を大量に輸入していた時代背景がうかがわれます。8世紀以降、日本では和同開珎ちゅうかいちんという銭貨が鑄造されていましたが、流通量が足りなくなると中国で造られた銭貨を輸入し、宋銭が流通しました。宋元通寶そうげんつうほうにはじまり、中国の宋代には歴代の改元のたびに元号を記した銭貨が鑄造されました。代表的なものとしては太平通寶たいへいつうほう、至道元寶しどうげんぼう、熙寧元寶きねいげんぼうなどが挙げられますが、特に数多く鑄造されたのは皇宋通寶(第3図)と元豊通寶げんぼうつうほうです。10世紀から11世紀にかけて多くの銭貨が鑄造され、日宋貿易を通じて宋銭は中国から日本に向けて大量に輸出されました。明銭は15世紀以降に輸入された銭貨です。明朝では1人の皇帝に1つの元号をつけていたため(一世一元制)、表面に皇帝の名が読みとれます。その中で、最も流通したのは永樂通寶えいらくつうほうといわれています。銭貨のデザインは時代の移り変わりとともに何度も変わり、出土状況に宗教的意味合いがみられるなど、様々な情報を読み取ることができます。

○佐倉城と城下町

慶長15年(1610年)に佐倉の領主となった土井利勝^{ど い としかつ}は、翌年より約7年かけて佐倉城を築きました。佐倉城は石垣^{いしがき}を用いず、土塁と空堀・水堀^{みずぼり}を巧みに配置し守りを固めた近世の城として設計されています。令和3年に行われた佐倉城跡(第13次)の調査では、中国産磁器皿が複数出土しています(第1図)。裏面を見ると底部に砂粒が多数付着しており(砂高台)、窯底と接着しないよう工夫がされていたことが見てとれます。よく見ると器厚が薄く作られ、輪郭がわずかに花弁形をしているなど、当時の中国の高い技術により作られた製品が輸入されていたことがわかります。

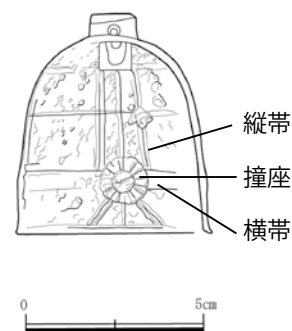


第1図 佐倉城跡出土中国産磁器皿と砂高台(裏面)

また、この時代には城下町が発達します。佐倉城下の新町遺跡からは陶磁器を主体として、様々な遺物が出土しました。佐倉市新町遺跡では人骨が出土した土坑が5基ありましたが、そのうちの1基からは、人骨とともに白色の磁器が埋納され直上に寛永通寶^{かんえいつうほう}が6枚置かれた状態で出土しました。この磁器は一見、着色されていないように見えますが、角度を変えて光を当ててみると、鳥や草花の絵柄が描かれているのが見てとれます(第2図)。素地の状態は不透明白色の濁手^{にごしで}という特徴的な白色をしており、佐賀県で1640年代に始まる有名な柿右衛門^{かき えもん}様式の磁器にもみられるもので、このような優品が墓域から出土する状況は珍しいものです。



第2図 新町遺跡出土磁器側面の絵柄輪郭と展開図



第3図 新町遺跡出土小鐘



このほか、高さ6cm程度の小型の鐘(第3図)が出土しました。外面は撞座をはじめ縦帯、中帯など大型の鐘と同じように細部まで梵鐘表現がされており、本体は厚さ約2mmと薄く造り込まれています。出土例が少なく、実際に使用されたかなどはわかっていません。

○巨大な地下遺構

近世の珍しい遺構としては、室状遺構が挙げられます。江戸時代に地下に造られた室状遺構は形態によって掘り抜き穴蔵や枅形穴蔵などに分類されますが、新町遺跡で検出された室状遺構は平面形が一辺が約4m、深さが1m以上あります(第4図)。また、天井部をローム層中に掘り残す構造の特徴から、地下式廻室の可能性が考えられます。

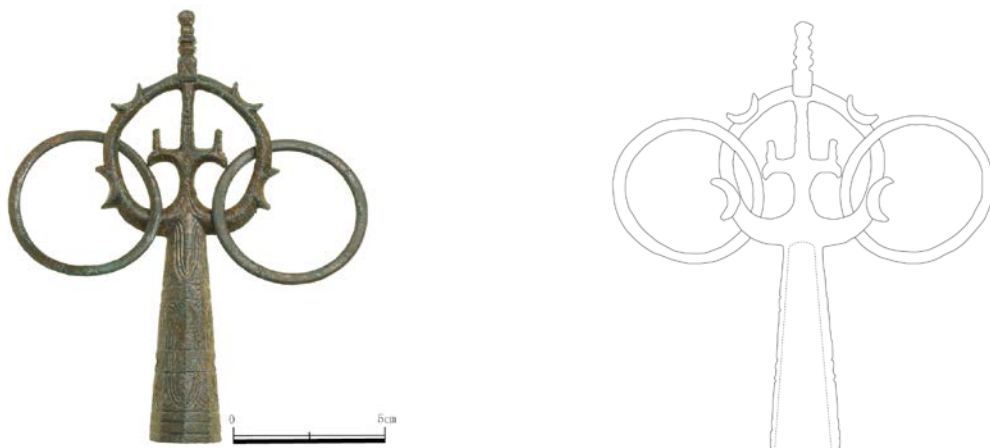


第4図 新町遺跡検出室状遺構と内部構造(イメージ)

※古泉弘1990『江戸の穴』より引用、再トレース(一部改変)

この室状遺構が検出されたすぐ近くの遺構からは、錫杖頭と呼ばれる遊行僧が携帯する杖が出土しました(第5図)。上部の五輪塔をかたどった大きな輪に遊環が通してあり、この遊環が杖をつくたびに音を立てることにより熊などの猛獣を寄せつけず、ある時は集落に修行僧が来たことを伝え、食べ物などの布施を受けたといわれています。新町遺跡からは錫杖頭が井戸状遺構の上部から出土しており、井戸を埋める際の儀式に使用した可能性が推測されます。

このように、近代の遺跡は城跡のみならず、ともに発展した城下町から出土した遺物からも当時の生活や風習についてうかがい知ることができます。



第5図 新町遺跡出土錫杖頭と断面



当センターに新加盟した柏市について、その特徴を簡単にご紹介します！

○柏市の遺跡

柏市は千葉県北西部に位置し、起伏の少ない平坦な台地と、利根川や手賀沼及びこれに注ぐ小河川の周囲に広がる低地によって成り立っています。今から約3万8千年前の旧石器時代以降、連綿とつづく人々の生活の痕跡が、「遺跡」として市内各所で確認されており、発掘調査対象となる遺跡の数は508カ所に及んでいます。

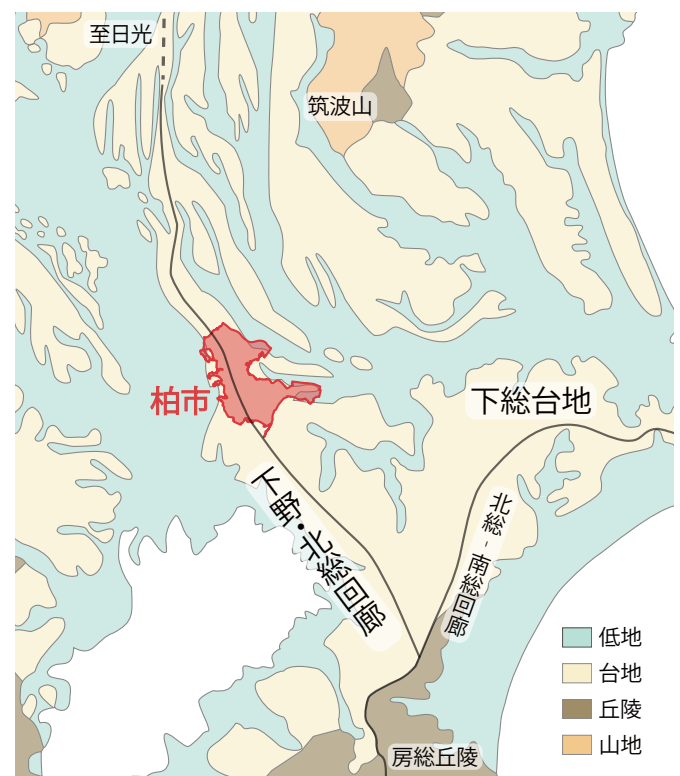
○交通の要所・柏

房総半島の地形は、大きく台地、丘陵、低地に分けられ、水系は3つに区分することができます。3つの水系を区分する分水嶺^{ぶんすいりょう}は、台地の尾根を走る長大な自然道となっていました。1つは房総丘陵と北総を結ぶ「北総-南総回廊」^{ほくそう なんそうかいろう}で印旛郡内を通っており、もう1つが「下野-北総回廊」^{しもつけ ほくそうかいろう}で柏市域を通っています。現在は江戸時代に行われた利根川の流路を東に変える事業により分断されているこの道は、房総半島内で収まらず、後期旧石器時代以降には日光方面へと続いていました。この房総半島と本州を結ぶ一本道は、各時代の主要交通路として利用されたと考えられます。

当時、この道の両側には深い谷と湿地が広がり、シカなどの動物はこの通り道を南北に移動し、さらに人々も動物を追って同じように移動していたことでしょう。江戸時代には日光 東 往還^{にっとうひがしおうかん}として使われ、現代は東武野田線や国道16号が敷設されるなど、重要な交通路として使用されつづけています。柏市域は、動物と人々共通の大きな通り道に接する、とても便利なところなのです。



柏市の遺跡分布図



関東地方の地形区分

※『千葉県の歴史』通史編原・古代1から引用・改変



○旧石器遺物の宝庫

柏市内には68か所の旧石器時代の遺跡が所在し、市内の発掘調査成果では20,000点を超える後期旧石器時代の遺物が報告されています。また、市内北部の常磐自動車道・つくばエクスプレス沿線での大規模開発に伴う発掘調査で大きな成果が得られています。

「下野-北総回廊」は野生動物たちの通り道であり、動物たちを追って旧石器時代の狩人たちが柏を頻りに訪れていたことでしょう。槍先やナイフなど狩りのための道具となる石器を作った跡が発掘調査で見つかっています。また、遺跡から出土した石器の石材を調べると、北関東や東北などで産出されるものがみられ、「下野-北総回廊」を通して運ばれたものと考えられます。

○柏に花咲く縄文文化

千葉県は貝塚王国といわれるほど、縄文貝塚が多い場所です。縄文時代早期の終わり頃から前期にかけて、縄文海進によりできた「奥東京湾」「古鬼怒湾^{こきぬ}」という2つの大きな内海が存在により、豊かな海産物が活発に利用されるようになりました。

柏の東西にはハマグリなどを採取できる海があり、数多くの貝塚や集落が県北西部に集中していることから、この地域が栄えていたことがうかがえます。

中期になると東京湾東岸に、千葉市加曽利貝塚に代表される大型貝塚が集中します。この頃、柏市内には大型貝塚は見られませんが、環状集落と呼ばれる、真ん



出山遺跡(第7次)調査区全景
※空撮合成写真

中に広場をもち、住居跡と貯蔵穴がドーナツ状に集中する大きな集落が複数みられるようになります。つくばエクスプレス柏たなか駅周辺の大室小山台遺跡・寺下前遺跡・大松遺跡、柏インター周辺の出山遺跡・中山新田遺跡で近年確認され、その豊富な遺物量からも注目されています。

これらの発掘調査成果から、柏は「下野-北総回廊」を行き来する動物資源、内海からもたらされる海産資源に恵まれ、人々が集まる縄文時代中期の一大中心地であったと考えられています。



○柏は他地域との交流地点！

縄文時代晩期以降、柏ではしばらく人々の生活の痕跡が見られませんが、弥生時代後期になると小規模なムラが点在するようになります。これらのムラからは、縄文を施した土器群が出土します。この文化圏は、縄文海退後も浅い内海として中世まで存在した、現在の手賀沼・印旛沼・霞ヶ浦・北浦などをひと続きにした内海を中心に分布します。



戸張一番割遺跡出土遺物

また、弥生時代末から古墳時代初めにかけて、西からの影響を伺わせる重要な遺跡が多く見つっています。その中でも、古墳時代の幕開けを告げる遺跡として注目されるのが戸張一番割遺跡です。環濠に囲まれた集落がつくられ、鏡をはじめとする青銅製品、畿内・北陸・東海地方の特徴をもつ外来系土器が出土しており、様々な地域の影響を受け入れてきたことがうかがえます。

○古代東海道が通っていた！？

律令国家が成立すると、都と地方を結ぶ駅路として東海道が整備されました。いまだ具体的な位置は特定されていませんが、平安時代初期において、下総国府(市川市)と常陸国府(茨城県石岡市)を結ぶルートが柏市域を通っていたのではないかと説があります。

街道に置かれた駅家の一つ、茜津駅の推定地とされる中馬場遺跡は、古墳時代～中近世にかけて継続された市内屈指の大集落であり、9世紀代を中心として集落の最盛期を迎えます。内海に面した立地であり、水陸交通の要所として長期にわたり歴史が展開されてきたことがわかる遺跡です。



駅路想定図

※『千葉県の歴史資料編考古3』から引用

○知られざる中・近世の柏

柏市内には24か所の中世城館跡が知られています。中でも15世紀中頃から16世紀にかけて、柏市域とその周辺は争いの絶えない地域であったことが古文書などの史料から推測されており、手賀沼西端から南部一帯の水上交通の要衝に城館跡が集中しています。

近世には、千葉県内に江戸幕府直轄の牧が置られました。柏市内の大部分にかかるのが小金牧のうちの高田台牧、上野牧、中野牧です。牧と村の境、または牧内部を区分するために築かれた野馬土手が市内に多く残されています。



○柏の珍品—古墳に眠る石枕—

弁天古墳は関東三大弁天の一つとして知られる^{ふせ べんてんとうかい じ}布施弁天東海寺の南側に築かれた前方後円墳です。木製の棺を直接土に納めた埋葬施設から様々な副葬品が出土し、その中に死者のための枕である「石枕」と、勾玉を背中合わせに結んだような形の^{りっか}「立花」がありました。

古墳時代中頃、古墳の埋葬に使われるようになった石枕は、全国でも茨城県南部から千葉県北部(常総地域)の利根川下流域に分布が集中しています。立花を伴い、それを立てると思われる孔が石枕に施されるものが多く、「常総型石枕」とも呼ばれています。分布の中心は香取地域から印旛沼周辺ですが、弁天古墳は、我孫子市^{かねづか}金塚古墳とともに集中的分布圏の西端にあたります。

弁天古墳の石枕と立花の特徴は、ほかの石枕は円形も多いなか、方形に近い平面形をしていること、13個の立花受孔を有することが挙げられます。また立花は、勾玉部が丸みを帯び、頭部と尾部が明瞭に識別できるAタイプ4点と、勾玉部が扁平で、頭部と尾部が不明瞭なBタイプ5点の大きく2種類に分けられます。両者は形状のみならず、石質や製作技術も異なるという特徴があります。

滑石を産出しないこの地域で、遠い地から石材を入手し、死者に手向ける枕と立花を作ることは特別な意味があったと思われます。弁天古墳の埋葬施設からはこのほかに滑石製模造品・白玉、鉄剣、鉄製刀子が出土しており、これらは柏市指定文化財になっています。



埋葬施設遺物出土状況(北から)



弁天古墳 石枕・立花

コラム：ネズミにかじられた！？

『古事記』や『日本書紀』には、埋葬する前に一定期間、^{もがりのみや もや}殯宮や喪屋などと呼ばれる施設に死者を安置して儀礼をおこなう「殯」に関する記載があります。千葉市東寺山石神2号墳では、立花に地上で生息するクマネズミのかじり痕が観察されたことから、古墳時代に^{もがり}「殯」が実在したという見解が示されました。クマネズミは門歯の伸び過ぎを防ぐために、食物となりえない堅い物をかじる習性があります。お供え物など、ネズミが集まる場所の近くに石枕が置かれていたと推定されます。

弁天古墳の立花2点にも、類似するキズが勾玉部に認められることから、石枕と立花が「殯」に関係する遺物である可能性が考えられます。



展示目録

旧石器時代

番号	資料名称	遺跡名	遺構名	市町村	備考
1	東内野型尖頭器	東内野遺跡	—	富里市	
2	接合資料(尖頭器+削片)	東内野遺跡	—	富里市	
3	接合資料(尖頭器+削片)	東内野遺跡	—	富里市	

縄文時代

番号	資料名称	遺跡名	遺構名	市町村	備考
4	抽象文土器	水神作遺跡	22号土坑	成田市	期間限定公開(令和7年12月～令和8年2月)
5	鳥形把手	山口雷土遺跡	包含層	成田市	
6	動物形土製品	吉見台遺跡	遺物包含層Ⅳ層	佐倉市	期間限定公開(令和8年4月以降)
7	動物形土製品	吉見台遺跡	遺物包含層Ⅰ層	佐倉市	期間限定公開(令和8年4月以降)
8	動物形土製品	吉見台遺跡	遺物包含層Ⅳ層	佐倉市	期間限定公開(令和8年4月以降)
9	動物形土製品	吉見台遺跡	遺物包含層Ⅱ層	佐倉市	期間限定公開(令和8年4月以降)
10	動物形土製品	吉見台遺跡A地点	遺物包含層	佐倉市	
11	動物模倣浅鉢	宮内井戸作遺跡	730号土坑	佐倉市	
12	鳥形把手	宮内井戸作遺跡	表採	佐倉市	
13	獣面把手	木戸先遺跡	7・8号住居跡	四街道市	4点
14	骨角器	馬場遺跡(第5地点)	241号土坑	印西市	7点
15	貝刃	馬場遺跡(第5地点)	241号土坑	印西市	2点
16	シカの角	馬場遺跡(第5地点)	241号土坑	印西市	
17	抽象文土器	寺下前遺跡(第21次)	22号土坑	柏市	
18	蛇体把手	出山遺跡(第7次)	遺構外	柏市	

弥生時代

番号	資料名称	遺跡名	遺構名	市町村	備考
19	石包丁片	大崎台遺跡	102号住居跡	佐倉市	
20	土製品	飯野町土族屋敷跡	2号住居跡	佐倉市	稲粃圧痕付

古墳時代

番号	資料名称	遺跡名	遺構名	市町村	備考
21	装飾壺	西御門新堤遺跡	33号住居跡	佐倉市	
22	ミニチュア土器	西御門新堤遺跡	33号住居跡	佐倉市	2点
23	ミニチュア土器	西御門新堤遺跡	5号土坑	佐倉市	3点
24	ミニチュア土器	西御門新堤遺跡	10～12号土坑	佐倉市	3点
25	土師器 坏	高岡大福寺遺跡	90号土坑	佐倉市	3点
26	土師器 高坏	高岡大福寺遺跡	90号土坑	佐倉市	2点
27	土師器 小型鉢	高岡大福寺遺跡	90号土坑	佐倉市	
28	土師器 小型壺	高岡大福寺遺跡	90号土坑	佐倉市	
29	初期須恵器	駒詰遺跡 第1地点	1号住居跡	富里市	
30	土師器 坏	駒詰遺跡 第1地点	1号祭祀跡	富里市	2点
31	土師器 高坏	駒詰遺跡 第1地点	1号祭祀跡	富里市	2点
32	土師器 壺	駒詰遺跡 第1地点	1号祭祀跡	富里市	
33	初期須恵器	駒詰遺跡 第1地点	1号祭祀跡	富里市	
34	剣形石製模造品	駒詰遺跡 第1地点	1号祭祀跡	富里市	2点
35	有孔円板	駒詰遺跡 第1地点	1号祭祀跡	富里市	2点
36	勾玉	駒詰遺跡 第1地点	1号祭祀跡	富里市	
37	初期須恵器	駒詰遺跡 第3地点	2号住居跡	富里市	

奈良・平安時代

番号	資料名称	遺跡名	遺構名	市町村	備考
38	金環	台方下方Ⅰ遺跡	120号住居跡	成田市	
39	金銅製巡方	台方下方Ⅰ遺跡Ⅱ区	154号住居跡	成田市	
40	吊金具	台方下方Ⅱ遺跡Ⅰ区	32号住居跡	成田市	
41	巡方裏金具	台方下方Ⅱ遺跡Ⅱ区	C-8-6グリッド	成田市	
42	金環	台方下方Ⅱ遺跡Ⅱ区	266号住居跡	成田市	
43	墨書土器「歳神」	大袋腰巻遺跡	110号住居跡	成田市	
44	刻書土器「神奉」	大袋腰巻遺跡	5号住居跡	成田市	
45	墨書土器「酒杯」	南団護台遺跡第7地点	6号住居跡	成田市	
46	海獣葡萄鏡	野毛平木戸下遺跡	19号住居跡	成田市	
47	墨書土器「白井寺」	六拾部遺跡	74号土坑	佐倉市	
48	墨書土器「山梨一」	馬込№一遺跡	1号住居跡	四街道市	
49	祭祀に使われた手握ね土器	鳴神山遺跡	Ⅱ区 4号溝	印西市	6点
50	墨書土器 「国玉神上奉丈部鳥万呂」	鳴神山遺跡	Ⅰ区 6号住居跡	印西市	
51	墨書土器 「下総国埴生郡酢取郷、車持 □…□歴二年正月十四…」	池ノ下遺跡	3号住居跡	印西市	
52	墨書土器「開」	山田虎ノ作遺跡	2号住居跡	印西市	
53	墨書土器「吉」	山田虎ノ作遺跡	8号住居跡	印西市	
54	墨書土器「吉」	山田虎ノ作遺跡	8号住居跡	印西市	
55	墨書土器「吉高調」	東海道遺跡(第2地点)	Ⅲ区 2号住居跡	印西市	
56	墨書土器「家」	油作第2遺跡	13号住居跡	印西市	
57	墨書土器「大神」	油作第2遺跡	27号住居跡	印西市	
58	三重圏文縁単弁八葉蓮華文 軒丸瓦	龍角寺五斗葺瓦窯跡	—	栄町	
59	三重圏文縁単弁八葉蓮華文 軒丸瓦	龍角寺五斗葺瓦窯跡	—	栄町	
60	三重圏文縁単弁八葉蓮華文 軒丸瓦	龍角寺五斗葺瓦窯跡	—	栄町	
61	三重弧文軒平瓦	龍角寺五斗葺瓦窯跡	—	栄町	
62	文字瓦「皮尔□」	龍角寺五斗葺瓦窯跡	—	栄町	
63	文字瓦「加刀利」	龍角寺五斗葺瓦窯跡	—	栄町	
64	墨書土器「大神」	宮ノ後遺跡	10号住居跡	栄町	
65	墨書土器「㊦」	花前Ⅱ-1遺跡	42遺物集中地点	柏市	
66	墨書土器「☆」	花前Ⅱ-1遺跡	13、31、32号 住居跡	柏市	
67	墨書土器「☆」	花前Ⅰ遺跡	11号住居跡	柏市	
68	墨書土器「☆」	花前Ⅰ遺跡	40号住居跡	柏市	
69	墨書土器「㊦」	花前Ⅰ遺跡	40号住居跡	柏市	

中世

番号	資料名称	遺跡名	遺構名	市町村	備考
70	銭貨(紹聖元寶)	大蛇中芝遺跡	22号溝	佐倉市	
71	銭貨(洪武通寶)	大蛇中芝遺跡	2D-06	佐倉市	
72	銭貨(祥符元寶)	神門房下遺跡C地点	16号土坑	佐倉市	
73	銭貨(景祐元寶)	神門房下遺跡C地点	遺構外	佐倉市	
74	銭貨(皇宋通寶)	神門房下遺跡C地点	143号土坑	佐倉市	
75	銭貨(治平元寶)	神門房下遺跡C地点	遺構外	佐倉市	
76	銭貨(熙寧元寶)	神門房下遺跡C地点	P137	佐倉市	
77	銭貨(元豐通寶)	神門房下遺跡C地点	144号土坑	佐倉市	
78	銭貨(元祐通寶)	神門房下遺跡C地点	遺構外	佐倉市	
79	銭貨(政和通寶)	神門房下遺跡C地点	遺構外	佐倉市	
80	五輪塔(火輪)	古屋城跡	障子堀	四街道市	
81	五輪塔(水輪)	古屋城跡	空堀	四街道市	
82	陶器 天目茶碗	和良比堀込城跡	001空堀带状郭	四街道市	

近世

番号	資料名称	遺跡名	遺構名	市町村	備考
83	磁器	新町遺跡	32号土坑	佐倉市	
84	小鐘	新町遺跡	9号土坑	佐倉市	
85	天目茶碗	新町遺跡	25号土坑	佐倉市	
86	錫杖頭	新町遺跡	6号土坑	佐倉市	
87	銭貨(寛永通寶)	新町遺跡	11号土坑	佐倉市	
88	銭貨(寛永通寶)	新町遺跡	25号土坑	佐倉市	
89	磁器皿(砂高台)	佐倉城跡(第13次)	1号土坑	佐倉市	2点
90	土師質土器 焼塩壺	佐倉城跡(第13次)	遺構外	佐倉市	
91	鯔瓦	佐倉城跡(第13次)	1号土坑	佐倉市	

柏市

番号	資料名称	遺跡名	遺構名	市町村	備考
92	土器台	寺下前遺跡(第21次)	2号住居跡	柏市	
93	深鉢	寺下前遺跡(第21次)	4号住居跡	柏市	
94	浅鉢	寺下前遺跡(第21次)	19号土坑	柏市	
95	深鉢	出山遺跡(第7次)	135号住居跡	柏市	
96	深鉢	出山遺跡(第7次)	143号住居跡	柏市	
97	深鉢	出山遺跡(第7次)	626号土坑	柏市	
98	深鉢	出山遺跡(第7次)	645号土坑	柏市	
99	深鉢	出山遺跡(第12次)	2423号土坑	柏市	期間限定公開(令和7年11月第4週から)
100	深鉢	出山遺跡(第12次)	2527号土坑	柏市	期間限定公開(令和7年11月第4週から)
101	深鉢	林台遺跡(第3・4次)	8号住居跡	柏市	期間限定公開(令和7年11月第4週から)
102	石枕	弁天古墳	埋葬施設	柏市	
103	立花	弁天古墳	埋葬施設	柏市	9点
104	刀子形滑石製模造品	弁天古墳	埋葬施設	柏市	2点
105	斧形滑石製模造品	弁天古墳	埋葬施設	柏市	3点
106	白玉	弁天古墳	埋葬施設	柏市	



印旛・柏の 珍品展

(公財)印旛都市文化財センター
40th 記念企画展
Part 2

～発掘されたあれやこれ～

公益財団法人
印旛・柏文化財センター
Public interest incorporated foundation Inba-Kashiwa Cultural Property Center